

松 山 大 学 論 集
第24巻第4 - 2号抜刷
2012年10月発行

16世紀後半出雲の銭使用について

高 木 久 史

16 世紀後半出雲の錢使用について

高 木 久 史

は じ め に

日本中近世移行期貨幣史研究の近年の課題の一つが、錢使用秩序の地域分節的なありかたから統合へ至る経緯の復元である。そのための階梯として地域別事例研究を蓄積すべき研究段階に現在ある。この問題意識からこれまで私は越前・四国・九州北部の錢使用状況の事例研究を行った¹⁾。本稿では 16 世紀後半の出雲を対象に事例研究を行う。

中近世移行期出雲の錢使用に関する議論の出発点とすべきが本多博之氏の業績である²⁾。本多氏は大内・毛利領国たる中国地方・九州北部の錢使用の実態を、史料上の錢種呼称（「清料」など）を基準とした国横断的（「毛利氏領国」等と表現）事例整理という方法で復元する（とくに通用錢の基準錢との換算比による使用実態について）。その中で出雲の事例にも言及する。ただし地域横断的分析であるがため、中国～九州北部各国の地域性（またその有無）の叙述が埋没した観がある。そうであるならば、例えば、他の地域権力に比して広大な毛利領国の錢使用の地域性とその克服の経緯を復元するという視角を持てば、また新たな像を得られるのではないか。また出雲に関する本多氏の叙述に登場する錢種は本稿で示すごとく南京・鍛のみである。しかしこれもまた本稿で示すごとくそれら以外の錢種に関する記録もある。その評価が課題としてある。そこで本稿は本多氏が言及していない事例の拾遺（本多氏が言及する事例は本文でその旨を付記する）を含めて出雲の錢使用の実態を定点観測的に考察することでその特徴の復元を目指す。

議論の中心に置くのが錢の階層化の問題である。本多氏の議論が先鞭をつけたごとく、16世紀日本の錢使用の特徴に、等価値使用原則の解消—上位錢・基準錢と下位錢・通用錢との分化（全ての錢を1枚1文として必ずしも使用しない）や日常の小額取引と資産蓄蔵等とでの錢種の使い分け等により現象する、錢の階層化がある³⁾。その出雲での様相を中心に論じる。

なお史料上の錢種呼称の同一性は各史料が指し示す錢の実体の同一性を必ずしも意味しない。一方で史料上の呼称が異なる錢が実体としては同一である可能性もある。文献史学的方法のこのような限界があることを認識した上で、本稿ではさしあたり史料上の呼称の同一性を基準に事例を整理する。

第1章 上位錢—精錢・清錢・精料・吉錢・古錢

本章では出雲での錢の階層分化にかかる上位錢と推測できる錢種事例を確認する。

まず精錢。上位錢と一般に解釈される錢種名称であり、上位錢を指す概念用語としてもしばしば使用される。なお本多氏は天文以前の筑前で「精」と呼称される錢の記録を検出している。また天正20年（1592）の朝鮮出兵に際し宿での「一文遣之精錢」の配備や次馬価額を「精錢」建てで豊臣秀次が規定する文書が山口県内に伝来する⁴⁾。本多氏はこの精錢を畿内のビタに比定するが、以下掲出する事例との異同は不詳である。

出雲の事例。永禄元年（1558）の尼子氏による杵築を対象とする法いわゆる杵築法度に「御供之時、国造江令沙汰料足之儀、自宿籍（以精）錢可沙汰之、自然於悪錢ハ、從旦那直ニ国造所江可相渡事」との条文がある⁵⁾。国造への御供は御供宿から「精錢」で支払うこととし、「悪錢」であれば旦那（参詣者）が国造所へ直接渡すよう定める。「悪錢」が即受領拒否されたわけではない（国造所での審査等何らかの手續を踏めば受領の可能性があった）ことを示唆し、当該時期に「精錢」「悪錢」が併用されたことがわかる（悪錢については次章で論じる）。なお当事例は「精錢」とそれ以外の（場合によって使用されうる）

銭とを併記する、すなわち上位銭・下位銭の分化（少なくとも二層構造だったこと）を明確に示す出雲での初見事例でもある。

次に清銭。本多氏が検出する近隣地域の事例に、大内氏支配下の豊前での伝統的基準銭としての記録がある（なお以前私は天文年間の豊後での使用事例について言及した）⁶⁾ 中国地方の事例の検出はない。

出雲の事例。年月日未詳（慶長4年（1599）以後成立）の毛利氏等から神魂社・伊弉諾社（現 真名井神社）への寄進の記録によると、天正18年（1590）2月10日に秀吉の関東出兵参加に際しての祝儀として吉川広家から「神魂へ御太刀代三百疋清銭御進納候」とある。また広家は、同19年（1591）6月21日に富田城請取の祝儀として「二貫四百文清銭」を、同年8月18日に入城に際しての祈念として「三百疋清銭」を、同20年2月23日に大陸出兵の門出として「清銭三百疋」を、文禄2年（1593）6月に「三百疋清銭」を進納した。同3年（1594）には広家母と子・才熊丸が「二百疋御湯立、清」を進納した⁷⁾「清」は恐らく清銭を表していよう。この記録は後世の記録ではあるが、天正末年から文禄3年までは「清銭」または「清」呼称の銭を神魂社等への支払手段に使用したことを示唆する⁸⁾

なお弘治4年（1558）3月2日付けの杵築大社三月会三番饗銭注文に「右代方何れも請銭也」とある⁹⁾。この注文の銭表記が「請銭」建てであることがわかる。請銭＝精銭または清銭であれば、先述の永禄元年杵築法度より早い上位銭記録と評価できる。

次に精料。その用字から先述の精銭・清銭と同じく上位銭たることが推測できる。なお本多氏は大内支配下の豊前・筑前・長門、毛利支配下の周防・石見・安芸での伝統的基準銭たる「精料」の記録を検出している。

出雲の事例。天正5年（1577）3月3日付け横田莊岩屋寺掟書¹⁰⁾は、衆徒出仕時の服装等の違反者につき「何茂精料十銭宛当坐可被出之」と罰則を定める。また同史料は正月堂勤行の出仕懈怠者につき「如開山掟者、過料五十銭可被出之、但当時精料可為十銭歟」と罰則を定める。かつての開山掟で50文だっ

たのをこの掟書で「精料」10文に変更したことがわかる。加えて、毎月5日の鎮守勤行の出仕懈怠者につき開山法度では「堂内畳一帖可被入」と定めていたがこの掟書で「見今改之、精料五拾銭当日可被出之」とのごとく、畳による物納から「精料」50文による銭納に改定した。以上のようにこの史料から、精料なる銭種を（計算貨幣の可能性もあるが）立法当事者が認識し寺院法の基準銭として使用したことがわかる。

次に吉銭。他の用例を寡聞にして知らないので詳細は不詳である。「吉米」（キチマイ）が良い米・上米を指す（『日本国語大辞典』）との「吉」の用例を参考とするに、上位銭を指すと推測する。

出雲の事例。天正12年（1584）4月の神魂社造営にかかる渡物注文に「一拾貫 吉銭 同（御供米）入目」とある¹¹⁾。神社への支払手段での吉銭使用を確認できる。

次に古銭。本多氏が検出する近隣地域の事例に、16世紀後半の毛利・小早川領国たる周防・長門・安芸・備後・備中・筑前での伝統的基準銭としての記録がある。また本多氏の議論を承けて四国の類似事例（「分銭古」等）につき以前私は議論した¹²⁾。

出雲の事例。慶長3年（1598）杵築社年中行事に、正月4日の出仕で所讃寺は百疋・神宮寺は一貫六百文を持参することになっているが「むかしにハ所讃寺之持せ古銭五百文、又神宮寺之持せ古銭二百文之由候へとも、当時ハ寺領無之故右之分と聞之申也」と規定する¹³⁾。かつての負担額を「古銭」建てで記述する。かつての基準銭たる「古銭」と当年中行事の建値として使用する基準銭との相違、つまり伝統的基準銭と異なる基準銭の成立を示唆する。この点については次章で再論する。

以上、一般的な上位銭名称たる精銭、そして本多氏が近隣地域で検出した清銭・古銭と同じ銭種名称の使用を出雲でも確認した。また精料・吉銭といった、本多氏が中国・九州北部で確認していない銭種を確認した。実体としての使用の終見は文禄3年の「清」に求めることができる。ただしこれら銭種相互

の実体上の同一性如何は不詳である。

第2章 下位銭・通用銭—悪銭・南京・鍛・なみ銭・当料

本章では出雲での下位銭・通用銭と推測できる銭種事例を確認する。

まず悪銭。本多氏が検出する近隣地域の事例に大内氏支配下の豊前の事例がある。中国地方の事例の検出はない。

出雲の事例。前章で示した永禄元年杵築法度にも「悪銭」記述があったが、これに先行するものに天文24年（1555）8月20日付け尼子氏奉行人連署書状がある。杵築大社上官・長谷氏に対し「才阿ミ銭」と両国造への御供銭に「悪銭」が含まれていたことを譴責する¹⁴⁾。管見の限り出雲の「悪銭」の初見事例である。また前章で示した例とこの例のみであり、元亀年間以後は事例を確認できない。なお越前でも永禄末年を終見として悪銭記録が解消する¹⁵⁾。史料上の悪銭呼称解消＝実態としての悪銭解消、との解釈は避けるべきであるが、出雲と越前とで現象が共時的であることは興味深い。

次に南京。一般には、例えば永禄12年（1569）信長撰銭令¹⁶⁾での基準銭の10分の1という低評価等を根拠に、下位銭と評価される。一方本多氏は、毛利領国での段銭支払手段や賦課基準への採用から、下位銭ではあるが単なる被忌避銭ではないと評価する。本多氏が検出する出雲近隣地域の事例に、弘治3年（1557）石見で「清料」の4分の1、永禄2年（1559）周防で基準銭の10分の1の比価での南京使用の記録がある。その他安芸での使用を本多氏が検出している。

出雲の事例。永禄9年（1566）ごろと考えられている年末詳2月26日付け毛利氏奉行人連署書状が初見である。杵築社三月会の合力に「南京銭」50貫を進納するとの記述がある¹⁷⁾。本多氏は奉納支払手段としての南京使用事例として引用する。天正10年（1582）3月22日付け国造北島久孝請取状に、杵築社三月会得分としての「なん料壺貫文」受領の記述がある¹⁸⁾。また天正13年（1585）4月21日付け杵築大社作事法度は、番匠作料上手は「南料貳百文」・

大鋸作料は「南料貳百文」・その手子は同じく「百文」と、日当を「南料」建てで規定する¹⁹⁾ 本多氏は以上の事例を、出雲で南京銭を「なん料」「南料」と称したことを示すとの推定の根拠として引用する。また低品位ながら領国内で流通する南京銭の現状を踏まえた政治的判断だったとの推測を示す。以上の事例から、杵築社への支払手段ならびに杵築社神社法²⁰⁾の基準銭に南京を使用したことがわかる。

天正15年(1587)7月28日付け鰐淵寺和多坊栄哉祈念注文によると、栄哉が神魂社へ「神楽銭壹貫貳百文、但南京也」を進上している²¹⁾ 杵築社以外の出雲の神社への奉納支払でも南京使用があったことがわかる。前章で天正12年の神魂社造営にかかり「吉銭」が神社へ納められた事例を示した。これが上位銭であるとする、天正10年代の神魂社への支払銭が一元化せず複数の階層の銭を併用したことになる(ただし時期差と解釈する余地もある)。天正20年正月16日付けで国造千家義広は被官の年頭礼・節句礼の額を「南京銭」建てで規定する²²⁾ 千家家の家政規則での南京の基準銭採用を示す。以上のように永禄9年ごろを初見とし天正10年代~同20年に南京の使用事例が実態・領主法レベルで確認できる。

次に鍛(ちゃん)。天正5年備中を初見としその後毛利領国一般に見られる通用銭の一つであり、南京より価値水準が高く(約4倍。ゆえに南京と別種²³⁾ 基準銭としての使用も含め同16年(1588)以後事例が増えるがこれは同15年以後の毛利惣国検地での畠分銭基準銭への鍛採用の影響である、と本多氏はいう。

出雲の事例。初見が天正8年(1580)に比定される年欠12月14日付け古志重信書状である。毛利氏奉行人児玉氏宛書状の進達を杵築御師にして有力商人たる坪内氏に依頼するに際し「ちゃん貳十疋進入」した²⁴⁾ この史料に関する本多氏の言及はないが、本多氏の検出事例群にあてはめれば、鍛事例編年で先述の天正5年備中の例に次ぐものであり、鍛事例の中で早いものである。天正14年(1586)仁保元棟領地付立案で美保関の權益につき「年中当料チヤン五百四五拾貫之内外土貢畢」とある²⁵⁾ 540~550貫文の収益が「当料」(後述)=

「チヤン」=鍛建てであることを示す、本多氏はいう。惣国検地に先行して備中のみならず出雲でも使用されたことがこれら史料からわかる。

惣国検地以後の事例。天正16年(1588)8月18日付け杵築御供定は、宿泊料を「ちゃん」建てで人別六百文と規定する²⁶⁾ 本多氏は当事例を当地での鍛使用事例として引用する。天正17年(1589)10月15日付け求院村指出案では畠銭が「ちゃん」建てで表記されている²⁷⁾ 本多氏は、毛利惣国検地の畠分銭基準銭としての政策的な鍛採用を示す根拠として引用する。文禄4年(1595)12月25日付け佐木浦(史料では佐義浦)付立(毛利氏検地奉行による)も「地銭」を「鍛」建てで記す²⁸⁾ 本多氏は屋敷地銭が鍛で見積もられた事例として引用する。以上のように1580年代末以後神社関連法・毛利氏の賦課基準銭に鍛が使用されたことがわかる。ただし先述のごとく千家家家政規則は天正20年に南京(先述のごとく本多氏の観測では鍛と別種)を基準銭に使用する。これらのことから天正末年の出雲の社会一般で基準銭が一元化していないことがわかる。その他年未詳だが、鍛と「なみ銭」とを併記する事例がある(後述)。

次になみ銭。本多氏が検出する近隣地域の事例に、大内氏支配下の豊前の通用銭としての「並銭」記録がある。中国地方の事例の検出はない。

出雲の事例。文禄5年(1596)8月8日付け佐木浦(史料では鷺浦)納所方定に「屋敷一ヶ所ニ二貫文宛、但なみ銭春秋共ニ」とある²⁹⁾ 屋敷公事賦課の基準銭に「なみ銭」を使用している。年月日未詳(慶長4年以後成立)の毛利氏などからの神魂社・伊弉諾社への寄進の記録につき前章で言及したが、同記録によると文禄5年に桂左馬助が「なみ銭千疋」を進納した。また慶長2年(1597)に吉川広家が「御馬代卅貫 普銭也」を進納している³⁰⁾ なみ銭=普銭だろう。前章で示したごとく当記録では文禄3年までは「清銭」「清」が支払手段として使用されていた。一方先の記述から文禄3年・同5年を境に神魂社・伊弉諾社への奉納支払手段が清銭からなみ銭へ転換したことがわかる。この転換は、実物としての清銭の存在の解消、具体的には吉川氏が保有する銭の中での清銭評価の銭の払底を示すと推測する。清銭からなみ銭への転換過程を

示す注目すべき史料である。

なみ銭の実体について情報を提供する史料がある。年未詳日隈神兵衛尉書状に、「千句御入目之儀、銀子貳百四十目、米式十俵計、小川□□申渡候、鍛十五貫文事者、不被申候、然者銀子貳百□□（四十）目之方ニ、なミ銭□（百）貫文、壹貫ニ貳文〔 〕米方□□□□文、合貳百□□目之都合〔 〕渡可申との儀にて□様候へ」とある。³¹⁾ 鍛と「なミ銭」との併記は、両者が別範疇たることを示唆する。

次に当料。本多氏が検出する近隣地域の事例に、天文年間筑前ならびに毛利支配下の周防・長門・安芸でかつて清料・古銭等と称された基準銭と比価設定の上使用された通用銭―「現行通用銭貨」を表現するものとしての当料に関する記録がある。

出雲の事例。元亀4年（1573）6月2日付け大和屋新三郎書状によると、杵築商人・大和屋一族内の紛争にかかり「当料五拾貫文」が当事者間で授受されて決着した。³²⁾ 天正4年（1576）3月27日付け三沢氏家臣連署書状は、杵築御供宿にかかる相論に際し「御供より当料貳百正宛」を沙汰するよう命じる。³³⁾ また先述の天正14年仁保元棟領地付立案に「当料チヤン五百四拾五貫文」とある。³⁴⁾ この史料に対する本多氏の評価は先述の通りである。ともかくこの史料では当料＝チヤン（鍛）を指すことがわかる。ただしこの史料以外の出雲の当料記録が全て鍛を指すかどうかは不詳である。³⁵⁾

以上、下位銭・通用銭の使用事例をみた。注目すべきが、神社法・賦課に際する南京・なみ銭の基準銭使用事例である。このことは本多氏が言及する毛利氏の鍛の基準銭採用の一方で、社会一般では基準銭が鍛に統一されていないことを示す（先述のごとく鍛と南京・なみ銭とは別範疇）。この含意については本稿末尾で述べる。

第3章 上位銭と下位銭との関係について

上位銭と下位銭との関係はどうか。永禄元年杵築法度が「精銭」「悪銭」を

併記することならびに悪銭に対する何らかの審査が行われたらしいことを先述した。選別を通過した悪銭を精銭と等価したのか、減価使用したのかはたまた緝への混入比率を制限した³⁶⁾のか等、悪銭運用の実態に関する記述はなく、わからない。

ただし銭種相互での比価設定方式を使用した例を本多氏が検出している。年末詳（永禄 10 年（1567）ごろか）6 月 13 日付け福井景吉書状をみると、杵築社 3 月会銭の支払を「六わり」「八わり」のどちらにするかをめぐる相論を毛利氏権力が調停したことがわかる³⁷⁾。本多氏によれば、わり（和利）とは基準銭（またはかつての基準銭建てでステロ化した価額）と現行通用銭との換算値（比）を指す（近隣地域では周防・長門・筑前・豊前・備中に事例あり）³⁸⁾。本多氏は先の事例を、永禄年間の出雲での和利に関する相論に際し裁定者として毛利氏が立ち現れたことを示すものとして引用する。この事例は、かつての基準銭（この時点で実体としては存在せず計算貨幣化している可能性もある）建てでステロ化した価額があり、この文書作成現在での通用銭との比価をどうするか、が論点になっているのだろう。ともかく当事例は、基準額との比価設定により通用銭による支払額を決める方法が永禄ごろの出雲で使われたことを示す。

お わ り に

本稿で言及した事例を整理する。出雲の上位銭・下位銭を併記する記録の初見は永禄元年である。精銭・清銭・清料・古銭等上位銭の使用記録はそれ以後文禄 3 年まで確認できる。下位銭・通用銭のうち悪銭記録の初見は天文 24 年である。南京は永禄 9 年ごろを初見とし天正 10 年以降実態・領主法（基準銭採用）レベル双方で使用を確認できる。鍛は備中と同じく惣国検地以前から使用され、天正 16 年以後文禄年間にかけて神社関連法・毛利氏の賦課基準銭にも使用された。なみ銭は文禄 5 年を初見とし、賦課基準銭・神社への奉納支払手段として使用され、また鍛と別範疇たることを確認した。当料呼称の使用も

元亀～天正年間にあることを確認した。上位銭と下位銭との関係については、杵築法度の「悪銭」については不詳だが、基準銭と通用銭との和利換算の永禄ごろの存在を確認した。

これら事例の含意。銭の階層化と複数カテゴリーの併用（基準銭以外の銭の使用を排除しない）と基準銭との比価設定に基づく通用銭使用ならびに通用銭基準銭化の傾向は、本多氏が示したごとく出雲の近隣地域と共時的である。また出雲の近隣でなくとも、例えば1570～80年代における通用銭の基準銭化は例えば奈良（ビタ）や越前（次銭）でも確認できる³⁹⁾。以上の諸現象は必ずしも出雲の特殊性ではない。

出雲の事例で注目すべきが、鍛の税制基準銭化―毛利氏による政策的採用の一方での、清銭等旧来の上位銭・基準銭の支払手段としての使用、ならびに南京・鍛と別種たる）なみ銭など鍛以外の通用銭の基準銭化または支払手段としての使用の存在である。このことは毛利領国のうち少なくとも16世紀の出雲の社会一般での通用銭の基準銭化の一方で、新たな基準銭が一化していない、すなわち出雲の銭使用秩序の分節性は少なくとも16世紀末までは解消されていないことを示す。このことは惣国検地での鍛の基準銭採用が銭使用秩序統一のトリガに必ずしもなりえていないことを示す。またそもそも銭種呼称が多いのもまた出雲の特徴である。例えば『多聞院日記』に現れる奈良の状況が基準銭とビタとの2種のみであるのと対照的である。一方越前の通用銭呼称はなみ（並・次）銭・当世銭・鏝銭が確認でき、呼称の多さの点で出雲と共通する⁴⁰⁾。

江戸開幕後の統一銭につながるビタの畿内やその周辺地域における16世紀第4四半期での普及の一方で、本稿で考察した出雲では銭の複層性が継続した。慶長13年のビタによる銭統一政策の一方での各地の銭の分節性の継続は従来から知られている⁴¹⁾。展望としては江戸開幕後のビタ基準銭化政策や寛永通宝普及による銭の地域分節性・階層性の解消が予想できる。その経緯すなわち銭使用秩序の統一過程の地域性の復元が課題として残る。

(追記) 本稿は平成 23～24 年度科研費学術研究助成基金助成金若手研究(B)「日本中近世移行期における国内鑄造銭の研究」(課題番号 23720334) の助成による成果の一部である。

註

- 1) 小著『日本中世貨幣史論』(校倉書房, 2010), 拙稿「16 世紀第 4 四半期四国の銭使用秩序に関するノート」(『安田女子大学紀要』39, 2011), 同「中近世移行期九州北部の銭の流通と生産に関する若干の事例」(『国語国文論集』42, 2012)。研究史についてもこれらを参照されたい。
- 2) 本多博之『戦国織豊期の貨幣と石高制』(吉川弘文館, 2006)。以下本稿で言及する本多氏の議論は全てこれによる。
- 3) 本多氏の議論のほか, 桜井英治「銭貨のダイナミズム」(鈴木公雄編『貨幣の地域史』岩波書店, 2007), 前掲註(1)小著など。
- 4) 「花岡八幡宮文書」(『山口県史』史料編中世 2) 52。
- 5) 『中世法制史料集』5, 法規・法令 482。当史料は前掲註(1)小著でも言及した。
- 6) 前掲註(1)拙稿「中近世移行期九州北部の銭の流通と生産に関する若干の事例」。
- 7) 『大社町史』史料編(古代・中世)(以下『大社』)2483。
- 8) なお『兼見卿記』天正 19 年 4 月 22 日条に「吉川申来, 祈禱廿壱貫式百請取之(中略)右之代以左京助申遣訖, 罷帰云, 半分悪銭也」とある(『兼見卿記』東京大学史料編纂所蔵史料目録データベース 2073-245)。川戸貴史氏は史料中の「吉川」を広家かとする(川戸貴史「16 世紀後半京都における貨幣の使用状況」『東京大学史料編纂所研究紀要』20, 2010)。吉川が吉田兼見へ納めた銭の半分が吉田側の認識では「悪銭」だったことがわかる。吉田側の抗議に対し, 同 23 日条に「半分十貫分以清銭可相渡之由申之間, 不及是非許容了, 千疋彼使者渡遣了」とあり, 吉川側が十貫を「清銭」で支払ったことがわかる。本文で示した出雲の神魂社・伊弉諾社関連の記録とこの記録の「清銭」との異同如何は不詳だが, 参考として示す。
- 9) 『大社』1376。
- 10) 『大社』1963。
- 11) 『大社』2072。
- 12) 前掲註(1)拙稿「16 世紀第 4 四半期四国の銭使用秩序に関するノート」。関連史料については本多氏の言及もある。
- 13) 『大社』2476。
- 14) 『大社』1299。
- 15) 前掲註(1)小著。
- 16) 『中世法制史料集』5, 法規・法令 685・686。

- 17) 『大社』1577。
- 18) 『大社』2033。
- 19) 『大社』2119。
- 20) 前掲註(19)は毛利氏被官発杵築社宛という書式をとる。しかし本多氏も語るとく、杵築社が原案を作成し毛利氏が認可したものと解釈すべきだろう。
- 21) 『大社』2213。
- 22) 『大社』2352。
- 23) なお本多氏は同一史料内で「南京」「鍛」「ひた」を併記する例を検出している(「村山家檀那帳」(『広島県史』古代中世資料編5)1。天正9年(1581))。これら3種の銭が別カテゴリであることを示唆する。
- 24) 『大社』2016。
- 25) 「厳島野坂文書」(『広島県史』古代中世資料編2)1298。
- 26) 『大社』2236。
- 27) 『大社』2260。
- 28) 『大社』2429。
- 29) 『大社』2447。
- 30) 前掲註(7)。
- 31) 『大社』2583。
- 32) 『大社』1877。
- 33) 『大社』1938。
- 34) 前掲註(25)。
- 35) 本多氏は元亀3年(1572)安芸地御前周辺の給地に関する記録中の「当料」が南京を指す事例を検出している(「中丸家文書」(『下関市史』資料編5)18,「野坂文書」(『広島県史』古代中世資料編3)148-1)。
- 36) 中国地方では15世紀後半から16世紀前半の大内氏撰銭令に先例がある(前掲註(1)小著)。
- 37) 『大社』1640。福井景吉は元就が杵築に常駐させた毛利氏被官(長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館,2000)。
- 38) 和利との表現ではないが、越前でも「三双倍」等と表現する事例がある(前掲註(1)小著)。
- 39) 前掲註(1)小著,前掲註(3)桜井論文。
- 40) 前掲註(1)小著。なお越前では、永禄年間まで確認できる「悪銭」と元亀年間以後確認できる「次銭」とは評価が同一(旧来の基準銭の3分の1)である。
- 41) 例えば慶長20年(1615)出羽秋田藩の御蔵算用で「並銭」と「京銭」=ビタとの換算が行われている(『梅津政景日記』元和3年(1617)10月13日条。小葉田淳『日本貨幣流通史』(刀江書房,1969),安国良一「貨幣の地域性と近世的統合」(前掲註(3)鈴木編著))。